とある無能の虚無還し(ヴァニティーリターン)

構想限界

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある無能の虚無還し（ヴァニティーリターン）

【Ｎコード】
Ｎ３０８２Ｍ

【作者名】
構想限界

【あらすじ】
約二三〇万人の内、実に八割を学生が占める学園都市。その学園都市の第七学区に住む布條恭也。夏休みも間近に迫り、布條は一ヶ月ほど前から雷女に付き纏われていた。不幸体質の親友を持つ布條は、様々な事件に巻き込まれて？？！

序章　雷の少女（前書き）

駄文しか書けないのに二次創作とか、俺は死ぬ気か……？

序章　雷の少女

「何で俺が……」

運が無かったんだと思う。

学校が終わり久しぶりに一人で帰路に着いていたところ、歩道の横で不良に絡まれている少女を見つけ「俺には関係ないし」と無視を決め込み、不良たちの居る道を脇から通り抜けようとした時だ。

偶然にも、足元に落ちていた空き缶を蹴飛ばしてしまい、サッカー選手がゴールへとシュートするように、少女に絡んでいた不良の一人の頭部へと直撃させてしまったのだ。

そこからは予想通り、不良たちが目標を少女から布條へと変えたのは、至極当然の事だった。

「テメェ、覚悟はできてんのかぁ？」

「おーイテェ。こりゃ骨折だな、テメエのせいで骨折しちまったんだ、慰謝料出してもらおうか？」

まるで説明書にでも乗っていそうなお決まり台詞を言ってきた不良たちに、布條は溜め息を付く。

空き缶が頭に当たった位で骨折しちまうほどお前のお頭は弱いんかい、と心の中でツッコミを入れ、この状況をどう打開しようか考

える。

目の前にいる不良は五人。

喧嘩(けんか)をしてもまず勝つことは不可能。

平凡な高校生である布條には、漫画に出てくる主人公のような身体能力がある訳でもなく、かといって言葉でこの場を鎮圧できるほどの話術も無いのだ。

ニヤニヤと顔を歪めている不良たちも、どうやら布條を見逃してくれる感じは微塵(みじん)も感じられない。

「何だんまり決め込んでんだよ？　あぁ？　燃やすぞテメェ」

いつまでも無言を貫いていた布條にイラついたのか、不良の一人が手を突き出す。

その掌から突如、

轟ッ！　と音を立てて炎の塊が生み出された。

手品でも無ければ、魔法でも無い。

超能力。

それこそが、不良が炎を生み出した能力(ちから)の正体だ。

ここ、学園都市では別段めずらしくも何ともない聞きなれた単語。

薬品投与や催眠術、または電気刺激などで脳を開発し、科学的に能力者を生み出している。それが学園都市のもう一つの顔だった。

しかし、学園都市で暮らす『学生』が全て能力に目覚めるわけではない。学生全体の内、約六割弱の学生は、どんなに頑張っても能力を使えない無能（レベル０）ばかりだ。

「見ての通り、俺は発火能力者（パイロキネシスト）だ。分かったか？　火傷（やけど）したくなかったらとっとと金出せっつってんだよ」

そう言い、発火能力者の不良が火球を弄びながら近づいてくる。

普通の奴ならここで大人しく金を出し、不良たち（こいつら）に袋叩きにされるのが落ちだろう。

しかし布條は、冷静に発火能力の不良を観察していた。

自然と右手を握る力が強くなる。頭の中にスイッチをイメージし、それをＯＮにして、右手に宿る異能の力を発動する。特に何かが変る訳ではないが、確かに布條の右手に宿っている異能（とくべつ）な力は発動していた。

息を一度大きく吸い、目前に迫る不良（てき）に向かって足を踏み出し、

「――ぐぎゃあっ！」

刹那――布條いる背後から青白い閃光が迸った。

一秒にも満たないほどの間を置いて、布條は目の前に不良たちが倒れているのを視認する。

五人いた不良の全員が地面に倒れ伏せていて、服の所々に焦げた後が見て取れた。

いきなりの事態に、布條は唖然とした表情を浮かべてその場に立ち尽くす。

「ど、どういうこと？」

訳がわからずそう呟くと、背後――

閃光の飛来してきた方から声が掛けられた。

「――ったく、身も知らぬ女の子を不良たち（バカども）から救

おうとするとか、正義の味方でも気取ってんの？　アンタ」

声のした方を振り返ってみれば、そこには灰色のプリーツスカートに半袖のブラウス、その上にサマーセーターという格好をした少女が立っていた。

呆れたような表情を浮かべる少女は、ゆっくりとした足取りで歩いてくる。

その度に少女の前髪が揺れ、髪と髪との間で青白い光が点滅を繰り返す。

「は、はぁ？……」

布條はその少女に見覚えがあった。それもついさっき。

そう、彼女は最初に不良たちに絡まれていた少女だったのだ。

「はぁ、いい加減ウザイと思ってたから、そいつらに電撃かましてやろうとしたところにアンタが乱入してくるし。挙句の果てには私を無視？」

少女は布條の問いに答える事無く、言葉を続けていく。

「無視ですか……」と呟き、とりあえず口を紡ぐ。こういう相手は、話をしている間に余計な事はしない方がいいと思ったからだ。

すると少女はぶつくさ文句を吐いた後、ぐいっと布條に顔を近づける。

そして眉間に眉を寄せたまま、口を開いた。

「ねえ、アンタ。ちょっと私のストレス解消に付き合ってくんない？」

「……はい？」

序章　雷の少女（後書き）

主人公の台詞少ねぇ。たったの三つって……。

序章　虚無還し（ヴァニティーリターン）の少年（前書き）

まさかの連続投稿。正直寝惚けながら書いたからどこかしら可笑しな事になっていそう。

序章　虚無還し（ヴァニティーリターン）の少年

何でこうなった。

布條（ふじょう）は河川敷で雷を使う能力者の少女と向かい合うように立ちながら、長い溜め息を吐き出した。そのまま魂が口から出て行きそうである。

横目で少女を見やれば、先ほどとは真逆、不機嫌な面（つら）は何処へ行ったのかと問い質してやりたくなるほどだ。

何が嬉しいのか、少女のその表情はまるで新しい玩具を見つけた子供のようである。

不良たちのせいでイライラが募り、ストレスが溜まっていたらしく、そのストレスを解消できる捌け口が見つかったのが嬉しいらしい。

捌け口にされる方からすれば、勘弁してほしいのだが。

布條は肩を落とし、恐る恐るといった感じに少女へと声を掛ける。

「あ、あの～……」

「……何？」

「これから一体なにを始めるんでしょうか……？」

どう見ても年下の少女に、何故か敬語で話してしまった。

布條がそう問うと、少女は「はぁ？」と呆れたような表情を浮かべる。

「決まってんでしょ。勝負よ勝負。戦うの。私と、アンタが」

まるで当然のようにそう述べた少女に、布條は頭を抱えたくなった。

ちくしょー。何でこんな時に限ってアイツがいないんだよ！

不幸を避雷針（ひらいしん）の如く受け止めてくれる親友がいれば、この場を任せて自分は逃げるのに、と考える。

しかも何だよ勝負って。

この際、使う言葉は勝負ではなく、虐めの間違いではないだろうか？

さながら、今の気分は校舎裏に不良たちに呼び出されたイジメられっ子の生徒である。

こんな事になった全ての原因は、あんな所に空き缶をポイ捨てしやがった奴のせいだ。見つけたら絞（し）めてやる。

そんな事できるはずも無いのに、見知らぬ人物へ呪いの言葉を吐いていると、少女が言葉を切り出してきた。

「そんじゃあ――始めるわよ？」

そう言うと同時に、少女の周りでバチバチと青白い光が点滅し始める。先ほど不良たちを撃退した時と同じ、少女の周りで電気が弾けているのだ。

「おいおいおい！　本気かぁ！？」

始めから冗談などと思ってはいなかったが。流石に布條も焦り始める。

自然と体が強張り、嫌な汗が体中から出てくるのを感じた。

「大丈夫よ。痛いのは――一瞬だけだからっ！」

「んなわけあるか！」と布條が返すよりも早く、少女の額から一筋の閃光が迸(ほとばし)る。

人の反応できる速度を超えた速さで飛来するそれに、布條は手を前に突き出す事しかできなかった。

一直線に放射線を引いて向かってくる雷は、一瞬の間を置いて布條の『右手』に直撃した。

そして右手に当たった雷は布條の体を駆け巡る――事は無かった。

「……は？」

少女は唖然と口を開き、目の前の現実に目を疑った。

雷は、布條の右手に触れた瞬間。まるで初めからそんなモノなど存在していなかったかのように、雷は消え去ったのだ。

攻撃した当の本人である少女でさえ、今この瞬間、何が起きた理解できていなかった。

元々、この一撃で終わらせるつもりだった少女からすれば、それはあまりにも予想外過ぎた。

「あ、あっぶねぇ……」

一方、雷を右手で消し去った布條は、全身に冷や汗を流しながら顔を引き攣らせていた。

少女の雷が放たれた瞬間。右手に宿る異能の力を使って雷を無効化させたのだ。

虚無還し（ヴァニティーリターン）。

それが布條の右手に宿る異能の力の正体だった。

右手で触れた、生物以外の万物全てを、存在する前の状態。つまりは『無』の状態へと還す事のできるこの異能（ちから）が、布條が唯一普通と掛け離れている証明（あかし）だった。

普段は能力を発動していないため、使えはしないが。頭の中でスイッチをイメージし、それをＯＦＦからＯＮに切り替える事によって使えるようになる。親友も似たような異能（ちから）を持っているが、それとはまた別物だ。

しかし能力の発動範囲が狭く、その効果が及ぼされるのは右手首から先だけだ。つまり、右手以外の部分に先ほどのような雷が当たれば致命傷は免れなかった、ということになる。

ぬあああああっ！　と内心で叫び声を上げ、もしもあの雷が右手以外に当たっていたらと思うとゾッとなる。

流石に殺そうと攻撃した訳では無いため、死ぬことは無いと思うが、かなりの威力があの一撃には込められていた。

「なん、なのよ。それ……」

少女の方も当然、困惑していた。

ただの無能力者（レベル０）だと思っていた男が、自分の放った雷を正体不明の力で消し去ったのだ。

それゆえ、今度は少女の方に焦りの表情が浮かび始める。

「なんなのよっ！　それはぁっ！」

搾り出すように叫ぶと、少女の体から今までと比べ物にならない程の威力が込められた雷撃が放たれる。

推定、数億ボルトにも達する雷撃は布條に襲い掛かり――再び右手に当たって消え去った。他にも複数の雷撃が飛来するが、そのどれもが布條の右手によって掻き消されていく。

「はあ、はあ……」

正体不明の力を持つ男を前にして、少女の心の中には恐怖という感情しか残っていなかった。肩で息をして、目の前の恐怖（そんざい）を犬歯を剥き出しにして睨み付ける。

「――全く、こんなの俺のキャラじゃないっての……」

少女から敵意丸出しにされて睨み付けられた布條は、今日最大の溜め息を付いた。

布條自身、あまりこの能力を使いたくはなかった。生まれもって存在したこの右手に宿る異能の力は、布條に良い思い出が無かったからだ。

布條としては、一刻も早くこの決闘とやらを終わらせたかった。

今日一日の不幸を呪うように。

地上を見下ろす月を忌々しげに見上げて、吐き出すように言い放った。

「ほんっと、今日はついてねえよなぁ」

序章　虚無還し（ヴァニティーリターン）の少年（後書き）

主人公の能力が判明しましたね。
実を言うと、主人公の能力については深く考えずに、思いついたモノを使いました。

第一章　七月十七日の遭遇（前書き）

次からは「とある科学の超電磁砲」に入ると思います。……多分。

第一章　七月十七日の遭遇

夏休みを間近に控えた布條(ふじょう)は一人、第七学区にある本屋へと向かっていた。

今日は、今まで読んでいたマンガの最終巻が発売するため、ファンである布條としては、この熱気の蒸しかえった道を十分以上歩いてでも手に入れたいほどの代物(しろもの)だったのだ。

しかし案の定。外へ一歩踏み出せば、そこは正に灼熱地獄。道行く人全員がハンカチを額に押し当て、汗をダラダラと流している。

「あちぃ～。洒落(しゃれ)になんねーぞ、この暑さは……」

両腕を垂らし、どこか覚束(おぼつか)ない足取りで歩いている布條を端から見れば、変質者のようにも間違われてもおかしくない。

額から浮き出てくる汗を拭う事はせず、一つの雫となった汗が頬を伝って落ちていく。

早く、早く本屋に行って涼みたい。布條は、今その一身で前へと進んでいた。

よく言う「あの電柱まで走ろう」作戦だ。

布條は「後、少し……」と呟き、もうこの暑さから開放される、と歓喜(かんき)していると、視界の先に見知った人物を発見した。

黒髪でツンツンしたヘアースタイルに、中肉中背の体つき。そして布條と同じ高校の制服を纏った親友――上条当麻(かみじょうとうま)の姿がそこに在った。

当麻(とうま)も布條に気が付いたらしく、いつも通り幸薄そうな顔をしている。

「よぉー当麻。お前も出掛けてたのか？」

「あぁ、そういうお前こそこれからどっか行くのか？」

「本屋にマンガを買いにな」

そう言うと当麻は「ああ、あれな」と納得したように頷いた。

「俺はこれから飯を食いに行ってから金を下ろしに行くところだ」

「そーいや金がねぇとか言ってたっけ？　まあ、カードが飲み込まれないように気をつけるこったな」

「冗談でもやめてくれ！　そんな事言うから怖くなってきただろうが！」

当麻は顔を青くして叫ぶと肩を落とす。きっと、自分の不幸体質ならホントにそんな事態が起きそうだ、とか考えているのだろう。

布條はその様を見て、当麻に同情の視線を向ける。それは今までに、とうま親友の不幸を目の当たりにしてきたからだろう。というか、実際に巻き込まれた事も良くある。

あれは何というか、宝くじに当たるよりも確立が低いんじゃないか？

当麻は一日に一度は必ず不幸な出来事に見舞われる。その度に「不幸だあああっ！」と叫ぶのは、もはやお約束と言っても過言ではない。

「ま、がんばんな。俺はそろそろ行くぜ？　あちぃし」

「はあ……、わかった。じゃあな」

深く溜め息をついた当麻に苦笑し、布條は本屋に向かって歩き出した。

「くっそ～……」

結果から言うと、本を手に入れる事はできなかった。

本屋に行き、マンガコーナーへ行ったのは良いが、まさか目の前で最終巻が無くなるとは思わなかった。一応、少し離れた本屋にも行ってみたが、結果は同じ。

手ぶらで帰る羽目になった布條は肩をガクッと落とす。

これじゃあ当麻の事は言えないな、と内心で愚痴を吐きながら、既に夕日で橙色に染まった帰路を歩いてく。

「……ん？　あっ！　アンタ！　ちょと待ちなさいよ！」

まさか当麻の不幸が俺にも伝染ってきたんじゃあ……。

そう考えると、背筋がゾクッとした。自分までアイツと同じくらい不幸な目にあう光景を想像してしまったからだ。

正直、あれだけは勘弁してほしい。

「――待ちなさいって言ってんでしょうがぁ！」

突如、叫び声と共に青白い光の矢が布條の歩いていた真横に着弾(ちゃくだん)した。
突然の事に一瞬だけ体が強張り、ああこれは……、と既知感(きちかん)を覚えながら後ろへと振り返る。
するとそこには、最近になって良く見るようになった少女が鬼のような形相で布條を睨み付けていた。
厄介(やっかい)なのに会っちまった、と布條は落胆(らくたん)の表情を浮かべ、思い切り溜め息を吐き出してやる。

「まぁたお前か、雷女(かみなりおんな)……」

「誰が雷女だ！　私には御坂美琴(みさかみこと)って名前があるって会う度に言ってんでしょうが！　アンタもアイツも、人の事をビリビリとか雷とかっ！　――いい加減にしろ！」

「いい加減にしてほしいのはこっちだっての。いつもいつも出会い頭に雷ぶっ放してきやがって！　そろそろ俺の胃に穴が開くわっ！」

そこまで言うと、互いに肩で息をして睨み合いを始める。
御坂と出会ったのは、大体一ヶ月ほど前の事だ。布條が学校帰り、不良たちに絡まれていた御坂を発見したが、自分には関係の無い事だ、と完全に無視をして通り過ぎようとしたところ、偶然(ぐうぜん)落ちていた空き缶を蹴飛ばしてしまい、御坂に絡んでいた不良の頭部へと命中させてしまったのだ。
そこから不良たちのターゲットは御坂から布條へと切り替わり、面倒くさい事に巻き込まれてしまった。
しかも不良たちの中に能力者がいて、その能力者の不良が、いざ布條に攻撃しようとした所に御坂が登場。瞬く間に自慢の雷撃で不

良たちを焼き払ってしまった。しかしどうやらストレスが全て解消できていなかったらしく、御坂はストレスの捌け口に八つ当たりを開始。しかし布條も右手に宿る力で雷を無効化していき、御坂は負けじと雷を乱射。それから数時間して、やっとの思いで御坂から逃げ切ったのだが。

それからが大変だった。

御坂はその日以来、布條を見掛けては喧嘩を吹っ掛けてくるようになってしまい、その度に逃走劇を繰り返す羽目になってしまった。

「それはそうと！　今から私と――」

「――今日はパス。流石に一日中暑い中動き回ってたから疲れてんだよ、俺は……」

御坂が言い終える前に言葉を遮り、布條は歩き出す。すると慌てたように御坂が布條の肩を掴んで引き止める。

暑い中数時間も歩き回り、しかも目的の物をゲットできなかったのだ。今の布條に御坂の相手をしてやるほどの元気は残っていない。

しかし、御坂は納得がいかないらしく声を荒げてきた。

「なっ！　ふ、ふざけんじゃないわよ！　こっちは早いとこアンタと決着を付けたいのよ！」

「んな事して何になるってんだよ？　大体、ここで今からドンパチやらかす気か？」

クイッと布條は道を歩く歩行者に親指を向ける。

ここは大通りのため、人通りが多い。もしもこんな場所で勝負を

始めれば第三者が巻き込まれるのは火を見るより明らかだ。
それに気づいたのか、御坂は「うっ」と言葉を詰まらせる。
どうもこいつは頭に血が上ると周りが見えなくなってしまうらしい。

「はぁ……じゃあな」

「あっ……」

御坂の手をゆっくりと肩から離し、寮のある方へと歩き出していく。

夕日の眩しさに顔を顰めながら、布條はのんびりと帰路を辿っていった。

第一章　七月十七日の遭遇（後書き）

まずはとある科学の超電磁砲から入っていきます。禁書目録編に入ったら、なるべく話を噛み合わせられるように進めていけたらな～と思っています。

第二章　『セブンスミスト』（前書き）

今回は店に入るまでの話です。

第二章　『セブンスミスト』

前回の敗北（はいぼく）の末、今日は見事にマンガを獲得（かくとく）する事ができ、布條は機嫌が良かった。右手にはマンガの入った袋を持ち、表情は満面の笑みが広がっていた。

大袈裟かもしれないが、天にも昇る気分とはこういう事なのだろうと思う。

「お？　恭也か？」

今にでもスキップを始めそうなほど浮かれていると、背後から声を掛けられ振り返る。

するとそこには上条当麻（かみじょうとうま）の姿があり、何故か小学生くらいの女の子と手を繋いでいた。

「あー、当麻？　お前の性癖（せいへき）に関して何も言うつもりは無いが。幼女誘拐はやめとけ？　な？」

「アナタは一体なにを誤解（ごかい）していらっしゃいますか！？　俺はただ、この子に『セブンスミスト』って店がどこに在るのか教えてくれって聞かれたから案内してただけだ！　上条さんにそんな特殊な性癖はありませんっ！」

「君は大丈夫だったか？　このお兄さん（へんたい）に何かされなかったか？」

「聞けよっ！」

当麻の言葉を無視し、手を繋いでいる少女へ話し掛け始めた布條に上条は声を上げる。

何としてでも、親友の言った特殊な性癖と言う言葉を即刻（そっこく）前言撤回させたかったからだ。

「え？　変な事ってなぁに？」

「いや、知らないならいいんだ。君はそのまま健やかに育ちなさい」

そう言うと、布條は女の子の頭を撫で立ち上がる。

「まあ冗談は置いといて……」

「頼むから冗談でもやめてくれ……」

冗談、と言った布條が言うと、当麻は肩を落として疲れたように溜め息をついた。

もしもそんな性癖を持っていると周囲に誤解された日には、変態の烙印を押される事になるだろう。

「んで？　どこに向かってるって？」

「セブンスミストってお店だよ！」

当麻に聞いたつもりだったのだが、隣にいた女の子が元気良く答えてきた。

セブンスミスト。

この近くにある洋服店だったか？　と布條は思い出す。

「なら、俺も付いてって良いか？　家に帰って買ったマンガ読んでてもいいけど、読み終わった後が暇になるしな」

「わたしは良いよ！　お兄ちゃんも良いよね？」

「んあ？　俺は別に良いけど……」

女の子は笑顔で了承の言葉を述べた後、当麻に同意を求めた。しかし当麻はどこか歯切れの悪い言葉で女の子の言葉に同意する。

それを聞いた布條は、ゆっくりと当麻に近づいていき、

「明日、学校でこの事についてバラされたくなかったら……」

悪魔の如く囁き、当麻にただ一つの選択肢を選ばせる。

案の定、布條の言葉を聞いた当麻は勢いよく後ろに下がると――

「――全然問題ないですっ！　つーか、むしろ付いてきてください！」

頭を下げて悲願（ひがん）するように叫んだ。

よく見ればその表情はどこか顔色が悪く、額からはだらだらと汗が流れている。

「よぉし！　そうと決まればさっさと行くか！」

布條はそう言うと、当麻の肩を叩いて歩き出していく。

「大丈夫？　お兄ちゃん？」

「はぁ……不幸だ」

当麻はそう言うと、女の子に「大丈夫だ」と言葉を返して、どこか覚束ない足取りで布條の後を付いていった。

途中、ＵＦＯキャッチャーでカエルのぬいぐるみを取っている男子生徒と擦れ違ったが、布條も当麻も気にする事なく店の中へと入っていった。

第二章　『セブンスミスト』（後書き）

最後の文章は、思いつかなかったからああしました。

第三章　知り合い？（前書き）

はい、段々と執筆ペースの落ちてきた作者です。本当は全部纏めるつもりだったのなぁ……ｏｒｚ

第三章　知り合い？

冷房の効いた店内は涼しく、まるで天国のようにも思えた。

「あ～涼し～」

歩いていた足を止め、この心地よさを全身で味わう。
当麻は女の子に連れられて、子供服売り場まで行っている。
布條はぶらぶらとそこら辺を歩き回っていたのだが、周りには女性用の服や下着しか置いていない。どうやら女性コーナーに入ってきてしまったようだ。

「……流石に男一人でここにいるのはマズイよな」

そう思い、当麻たちを探そうと踵を返すと、

――視界の中に挙動不審の人物を見つけた。

布條は思わず足を止め、挙動不審の人物を眺める。
茶色い髪にサマーブラウス、灰色のスカートという格好をした不審人物――御坂美琴（みさかみこと）がそこにいた。
いや、ここが服屋で、更に女性用のコーナーだからいても別に可笑しくはないのだろうが、それでもだ、抜き足差し足で辺りをキョロキョロと警戒するように見渡すその姿は誰が見ても不審者にしか見えないだろう。
布條は溜め息を吐いて、御坂へと近づいていく。

「何してんだ、お前？」

「――、ッ！？」

声を掛けた途端、御坂はバッとこちらに振り返り驚きの目を向けてくる。顔を茹蛸のように赤く染め、

「な、何でアンタがこんな所にいんのよっ！」

叫ぶように声を荒げた。

しかしそれは、いつものような感じでは無く、まるで羞恥心を隠すような声で言ってきた。

布條はそれを不振に思い、御坂の後ろにある鏡へ目を向け、

「何だ？　そのパジャマがどうかしたのか？」

「――なぁっ！？」

まさか聞かれるとは思っていなかったのか、御坂は赤かった顔を更に赤くする。

「あ、アンタには関係ないでしょうがっ！」

「はいはい、そうですね～」

布條は頭を掻き、面倒くさそうに視線を御坂から外す。

しかしその態度にイラついたのか、御坂は布條を睨み付ける。

「っ！　丁度いいわっ！　今からアンタと――」

「――お、いたいた。恭也、あんま一人でふらふらすんなって、……ゲッ！」

「あ、アンタ！」

御坂が体に電気を帯びた瞬間、まるで見計らったようなタイミングで当麻が現れた。もちろん、片手で女の子と手を繋ぎながら。

しかし当麻は、視線を布條から隣にいた御坂に移すと、まるで見てはいけないモノを見てしまったというような表情を浮かべた。

一方、御坂も当麻と目が合うと、驚きの表情を浮かべる。

「何だ、当麻。コイツと知り合いだったのか？」

「いやぁ～まあ。知り合いと言うか何と言うか……。つーか、そう言う恭也だってビリビリと知り合いだったのか？」

「俺か？　まあ、簡単に言うなら――追う者と追われる者」

布條がそう言うと、当麻もどこか納得した表情を浮かべ「お前も大変だったんだな……」と言ってきた。

「トキワダイのおねーちゃんだぁ！」

突然、当麻と手を繋いでいた女の子が、御坂を指差してろう言う。

「昨日のカバンの子……」

御坂もキョトンとした顔でそう呟いた。

この二人も知り合いかよ、と布條は思った。

「あのね、オシャレな人はここにくるってテレビでいってたの」

「そうなんだ」

御坂は前屈みになって女の子の頭を撫でる。

普段からこうなら俺も苦労しないのに……、と布條は心の中で呟いた。

女の子の頭を撫で終わると、御坂は顔を上げて布條と当麻を見る。

そして不適に笑い、

「それはそうと、アンタら二人が知り合いだったのは好都合だわ。今日こそアンタたちと決着を……」

「だぁー待て待て。お前の頭ん中にはそれしかねーのか！」

いつも通りお決まりの台詞を吐こうとした御坂を慌てて止める。

「そーだぞビリビリ。大体、お前はこんな人の沢山いる場所で始める気か？」

当麻がそう言うと、御坂は「うっ」と言葉を詰まらせ、顔を赤く染める。

ナイスだ当麻！　と布條は心の中で言い、ホッと安息する。

「文句があんなら消えてやっから。行こうぜ、恭也」

「そーだな」

女の子に入り口で待ってると告げて、布條と当麻は入り口の方へと歩き出していった。

第三章　知り合い？（後書き）

びみょーな終わり方だな、おい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3082m/

とある無能の虚無還し(ヴァニティーリターン)

2010年10月14日16時16分発行